追跡！幻の備後国大神神社

平田恵彦

はじめに

二年前（平成四年）の十月二四日、備陽史探訪の会は「郷土史初級講座　福山の信仰」を開催した。講師は神谷和孝名誉会長で、演題は「福山の信仰」だったが、内容は「備後国大神神社の比定について」ともいうべきものであった。

この中で神谷名誉会長は、大和国の大神神社について説明されたのち、備後国の大神神社をどこに比定すべきかについて話された。この時私は初級者の一人として講座に参加したが、自分なりに神谷説を検討してみて疑問を感じるところがあった。

浅学を省みず、その疑問についてまとめたのがこの文章である。が、なにせ今まで「歴史論文」なるものを書いたことがない。「突撃芸能レポート風」になってしまったことはご容赦願いたい。

一

まず神谷説を要約すると次のようになる。

①備後国大神神社の文献記録は『日本三代実録』の貞観三年（八六一）十月廿日の条に「備後国正六位上大神神　天照真良建雄神並授二従五位下一」と、初めて見える。

②大神神社と神奈備信仰のかかわりから、初めに比定の候補地を二つ考えた。第一に深安郡神辺町の黄葉山（神辺山）で、第二に府中市の甘南備神社である。

③このうち黄葉山は、神にゆかりの名で記された形跡はまったくないので、候補から外した。次に、府中市甘南備神社は諸条件（背後の三室山、近くを流れる竜田川、式内社であることなど）から有力であると考えた。

④これを裏付けるために馬屋原呂平の『西備名區』を調べたところ「大神神社、祭神大己貴命、社地不二分明一、或白二雨木一」とあり、さらに「三代実録に載せらる品治郡大神神社、是石畳神社に当たるべし。此神社祭地分明ならざれども、本村の神社、他村に勝れて社数多き中、石畳の神社というは、高さ一間四尺に、方一間一尺五寸、石にて畳み上げたる計にて社なし。是を思うに和州三輪の大明神は、式に大神神社とありて大社なるに、神殿を建ずして山を以って神躰とす。此を以って見れば此神、石畳のみにて神と祭れるは、彼三輪に准して是そ石

畳の神社、大神神社なるべし」と記されていて「大神神社＝石畳神社」説を提出している。これは『三代実録』以外では初めての文献資料との出会いであった。

⑤そこで、福山市駅家町雨木の石畳神社を現地調査したが、確証はえられなかった。現時点では、備後国の大神神社は、甘南備神社か石畳神社であろうという推定の形で留めておきたい。

二

このように神谷説によると「甘南備神社＝大神神社」あるいは「石畳神社＝大神神社」である。

以下これについて私の考えを記すが、その前に大神神社についてよくご存知ない読者のために、この神社について簡単にまとめておく。

①所在地は現在の奈良県桜井市三輪である。

近辺には日本最古の巨大前方後円墳である箸墓（陵墓参考地）や、行燈山古墳（崇神天皇陵に治定）・渋谷向山古墳（景行天皇陵に治定）がある。

②主祭神は大物主神（別名大己貴神、大国主神。いわゆる地祇中の地祇）である。

③大物主神は、『日本書紀』崇神天皇十年の条所載の倭迹迹日百襲姫との有名なエピソード（『古事記』にはこの説話はない）通りならば、蛇体であり、この神の原初的性格は雷神（あるいは龍神）、すなわち雨を支配するものであったろうと思われる。その後、軍事的性格や祟り神的性格をも持つようになった。また、醸造（酒）の神としても著名である。

④『日本書紀』崇神天皇の条に次のような記述がある。

国内に疫病多く、民の死亡するもの半ば以上になり（五年）、百姓の反逆するもの、流浪するものが出るようになったとき（六年）、天皇が卜占して神意を尋ねたところ、大物主神が夢枕に立ち「わが子大田田根子を以て、吾を祭らせたら、たちどころに平らぐであろう」といったという（七年）。これより大物主神の祭主は大田田根子となり、その子孫が三輪氏となった。

⑤祭主である三輪氏は、ヤマト王権の大王たちよりも古くからこの地を支配していたと考えられ、ヤマト王権成立において、あるいは成立以後も重大な役割を果たしたと思われる。

⑥大神神社の社殿は拝殿はあるが、本殿はない。御神体は三輪山（御諸山）それ自体である。

⑦三輪山中の神域は原則として禁足地となっており、辺津磐座、中津磐座、奥津磐座等で祭祀が行われてきた。また、これらの磐座からは古代祭祀の遺物も出土している。

⑧以上のように、大神神社は最も古い神社信仰の形態をよく現代に伝えており、「神奈備信仰の原点」「磐座信仰の原点」「古代信仰の原点」などといわれている。

三

では、神谷説の検討にはいる。

まず、神辺と黄葉山について考えてみよう。

通説では、神辺の語源は「神奈備」から来たということになっている。しかし、中世から近世にかけて、この地は「麓」呼ばれており（もちろん黄葉山の山麓にある集落の意味）、文献上、神辺という地名を中世以前に遡ることはできない。したがって、古代祭祀を示す語、神奈備から神辺となったという説には確証がない。

ただ、古代、神辺は吉備の穴海（安那海）・穴国として知られ、浅い海の沿岸であったろうといわれている。伝承によると、近世に入ってからでさえ、船で福山まで往復したという。また古代の山陽道も近世のよりもやや北よりだが、この地を通っていた。古代から近世にかけて交通の要所として開けていたことだけは認めてよいだろう。

次に黄葉山だが、吉野山とも呼ばれており、桜と紫陽花の名所として知られている。山上には、水野勝成（福山藩初代藩主）が入部当初居城とした中世山城・神辺城跡がある。ここからは山陽道（古代、中世とも）が一望の下に見渡せ、築城の条件としては絶好である。

この山麓には八幡社などいくつかの神社が存在するが、最も著名なものは北西の山麓にある天別豊姫神社〔注1〕である。これは『延喜式』神名帳に記載されている（いわゆる式内社）天別豊姫神社に比定されており、これは間違いない。そしてその主祭神は豊玉姫である。したがって、この神社は大神神社ではないと断定できる。

また、八幡社などの他の神社は、いずれも歴史が浅いものが多く、私も神谷氏と同じく、黄葉山には大神神社はないと考える。たとえ神辺の地名が神奈備からきていても、それは天別豊姫神社を祀る神奈備山であったからに違いない。

〔注1〕天別豊姫は山幸彦と結婚した海神の娘「豊玉毘売」のことである。神辺にこの神が祀られていることは、この地がかつて海に関係深かったことを暗示している。

〔参考〕

ここで、あとの議論にも必要なので、備後国の式内社をすべてあげておくことにする。

備後国十七座小並

安那郡二座小並　多祁伊奈大伎佐耶布都神社、天別豊姫神社
深津郡一座小　須佐能袁能神社
沼隈郡三座小並　高諸神社、沼名前神社、比古佐須伎神社
葦田郡二座小並　賀武奈備神社、國高依彦神社
品治郡一座小　多理比理神社
甲奴郡一座小　意賀美神社　奴可郡一座小　迩比都賣神社
恵蘇郡一座小　多可意加美神社　三上郡一座小　蘇羅比古神社
世羅郡一座小　和理比賣神社　御調郡一座小　賀羅加波神社
三次郡一座小　知波夜比賣神社　三谿郡一座小　知波夜比古神社

四

次に府中市の甘南備神社の検討にうつる。

この神社は、葦田郡の式内社・賀武奈備神社に比定されている。『三代実録』には、神谷氏のレジュメの通り、貞観九年（八六七）四月八日の条に「授二備後國従五位上甘南備神社正五位下一」とある。

この地に『三代実録』では、元慶二年（八七八）十一月十三日の条に「備後國正五位下甘南備（神）正五位上。従五位下天別豊姫神従五位上」とある。『三代実録』以外の六国史を探しても、これだけしか甘南備神社についての記載はない〔注2〕。この二例だけで判断するのは危険かもしれないが、私は次のように考える。

先に示したように、備後国の大神神社についての記述は、『三代実録』の貞観三年の条に初めて見える。そのわずか六年後に、大神神社をわざわざ違った名の甘南備神社と記すことはないのではないか。現に元慶二年には、貞観三年の条の甘南備神社をやはりそのまま甘南備神社と記している。これから素直に考えると、甘南備神社は大神神社ではないという結論に落ち着く。

ただし、記載された三件とも、『三代実録』での巻数が違う（編集者が異なれば、異なる表記にする可能性はなくはない）ので絶対とはいえないが、相当確度が高いと思う。

そこでこれを確かめるために私は府中を訪れた。

甘南備神社は本殿、拝殿、社務所とも非常に立派で、神楽殿、宝物館もあり、まず第一級の神社といってよい。ただ、背後の三室山は市の管理がおろそかになっているらしく、荒れ果てていた。遊歩道には雑草がはびこり、とても歩ける状態ではない。休憩所（だったところといったほうがよい）の内部さえ雑草の天国であった。

三室会館を訪ねると、ご婦人が出ていらっしゃった。縁起についてお尋ねすると、これをどうぞと『甘南備神社御由緒略記』という小冊子を下さった。宮司の所在をお尋ねすると、下の社務所にいらっしゃるということであった。

話をうかがう前に、由緒書に目を通すと、次のようにあった。

一、御鎮座の由来

（神さぶる千木仰ぐにもおもふかな　みむろの山の高きみいつを　加茂百樹）

遠く元明天皇和銅元年、備後の国に悪疫大に流行せし折、時の国守佐伯宿禰麿〔注3〕は、平素常に崇敬仕る出雲の国の美保の大神（事代主神）の御分霊を三室山に奉斎し、只管御祈祷申上げたところ、さしもの悪疫も日ならずして退散致したので、備後地方の民人は挙げて其の御霊験の誠に顕著なるに歓喜し、其の感謝報徳の誠心を結集して、いとも荘厳なる御神殿を造営し、父神大国主神と少彦名神を合わせ祀りて、祭神を盛大に厳修し奉りてより御神徳益々高く御神威日日新たにして、御社運益々興隆し給ひ、氏子崇敬者は日夜広大無辺なる御神徳に浴しているのである。（後略）

これによると、甘南備神社の主祭神は事代主神であり、島根県美保ケ関の美保神社から勧請したことになっている。もしこの社伝が正しければ、甘南備神社は大神神社ではないと断定できる。問題はこの縁起が正しいかどうかである。伝承によるものなのか、文献によるものなのかを宮司にお尋ねすることにした。

宮司は小田さんという七十歳くらいの方であった。小田宮司の話をまとめると以下のようになる。

①パンフレットにある社伝は、『蘆品郡志』や『備陽六郡志』などにかかれてあるらしい〔注4〕。ただ、私自身は読んで確認したことがない。歴史書の正規の記録というよりは、伝承をまとめたものといったほうがよいと思う。多くの神社の縁起も同じだろうと思う。

②個人的には大神神社というより、やはり美保神社、出雲大社とのつながりが強いと思う。神社のすぐ下の町は「出口」といって、これは神々の出口という意味だ。入口はもちろん出雲大社である。また一の鳥居、二の鳥居と続く参道、そして参拝門、拝殿、本殿を結ぶ線を延長するとちょうど出雲大社につきあたるようになっている。

③近くに「二本木」という地名もあるが、これは太古の祭祀を示すものだと思う。このあたりから、三室山を御神体として仰いでいたのではないだろうか。三室山からは、府中高校の故豊元国氏らの発掘により、祭祀遺物が発見されている。ただ現在は三室山が御神体ではない。

ここまで筆者は「甘南備神社＝大神神社」説に否定的な考えを述べて来たが、この説を完全には捨て切れぬほど、状況証拠は有力なものばかりある。まず、祭神は大国主神・事代主神・少彦名神の三神で、これは大神神社とほぼ一致する。次に、背後の三室山には三輪山と同様に、約二千年前の祭祀遺跡及び「磐座」が随所に残っている。また、神谷氏のレジュメにもあるように、三室山は御諸山（三輪山の別名）に通じ、しかもきれいな神奈備型の山であること、すぐ近くに竜田川が流れていることなどである。このことは、小田宮司も本当に大神神社に似ていると話されていた。

しかしながら、総合的に判断すると、社伝の典拠がはっきりしないのが難点とはいえ「甘南備神社＝大神神社」説は疑わしいといわざるをえない。

〔注2〕『甘南備神社御由緒略記』の「御社柄」には「淳仁天皇天平宝字四年従五位上に叙せられ」とあるが『続日本紀』にはこの記載がない。

〔注3〕『続日本紀』和銅元年三月十三日の条に「正五位上佐伯宿禰麻呂為二備後守一」とある。

〔注4〕『備陽六郡志』『蘆品郡志』『西備名區』『福山志料』とも由緒不明と伝え、この記事はなかった。たとえば『蘆品郡志』には「本社は出口町三室山に鎮座す、創建は和銅年中疾病の時、出雲国三保崎より勧請せしなりとあれとも確かからす」とある。

また、『西備名區』は「古老傳ニ出雲国三穂崎ヨリ御鎮座」と記したあと「祭神別ニ辨説アリ」と祭神に関し異説があることを示唆している。したがって、佐伯宿禰麻呂が備後に国司として赴任したことと結びついた伝承と考えるべきであろう。

五

駅家町雨木の石畳神社はどうだろうか。

雨木は、福山市の最高峰である蛇円山〔注5〕の山麓の集落であるが、近辺には服部川が流れ、服部本郷、服部永谷の地名もあるとおり、服部地区の一部と考えてよいと思う。

蛇円山には「くぐり岩」「船岩」「よろい岩」など、多くの巨石が存在し、磐座の材料にはことかかない。また、山の中腹では祭祀遺物が発掘されている。この点、御諸山、三室山などと同じ条件を満たしており、神奈備型の山であることもはっきりしている。

石畳神社はこの山の登山道に面して鎮座している。ただし、甘南備神社とは違い、決して大きな神社ではない。神社の入り口には石製の鳥居があり、これに「岩畳神社」〔注6〕と刻まれた石製の額がついている。

鳥居をくぐって階段を登ると、四本石柱が立っており、そのひとつには「式内岩畳神社」〔注7〕と刻まれている。境内の両側には、腰掛け型の石、加工された丸形石（おそらく五輪塔の一部）などが転がっていた。その先に御神体の磐座がある。驚くほど巨大なものではないが、何枚かの岩を組み合わせて作った、明らかに人工の磐座（磐座には自然石をそのまま使っているものも多い）である。『広島県神社誌』によれば、現在この神社の祭神は「国高依彦命」で大物主神ではない〔注8〕。

ところで、地名の服部であるが、これは機織部に通じ、古代に渡来系の人々が住んだことに因んでいることが多い。であるならば、この地域の中心的な神社である石畳神社は、当初は、渡来系の人々によって祭祀されていた可能性が高い。

すると、次のような疑問がおこる。

大神神社の祭神は大物主神で、これは最も代表的な地祇である。その大物主神を今来の人々（渡来人）が、石畳神社の祭神として果たして祀るであろうか。一般には、やはり渡来系の神々（蕃神）、少なくとも天神を祀るのではないだろうか。

〔注5〕「蛇園山」とも表記する。標高五四五・八m。山頂には高龍神社（地図等にある高竈は誤記ではないだろうか）が鎮座する。

〔注6〕現在、一般には「石畳神社」と表記され「いしだたみじんじゃ」「いわだたみじんじゃ」ともに呼ばれている。しかし、この額を素直に読むと、「いわだたみじんじゃ」となる。

〔注7〕この石柱の裏には「明治二十五年」と刻まれてあった。したがって、明治二十五年時点では「いわだたみじんじゃ」呼ばれていたと思われる。

〔注8〕『蘆品郡志』も「国高依彦命」としている。しかし、祭神（大物主神）は長い歴史の中で変わる事もある。

六

実は私には、神社関係に詳しい飯島さん（東京在住）という友人がいる。私は彼にこの疑問をぶつけてみた。すると「蛇円山という名の秘密」という小論を書いてこれに答えてくれた。

結論からいうと、「石畳神社＝大神神社」説は有力である、というものである。非常に興味深い論考だが、全文だと長くなるので、資料を引用しての叙述部分を省略し、以下紹介する。

蛇円山という山を見たこともなく、単にその名から、使用された文字から、勝手な推論を吐くわけだが、蛇円とは、やはり、蛇がとぐろを巻いた様子を表したものであろうか。

蛇の円ときたら、どうしても、とぐろを思わざるをえない。

また、蛇のとぐろを巻いた姿は、出雲大社の竜蛇様の絵にもあるように、神体としての蛇の中でも最も神聖なものであったらしい。それは、蛇のとぐろを巻いた姿態が、円錘型をしていて、神奈備型の山を表していたからだ。

どっしりと大地に腰を下ろす円錘形の山－その山と同じ姿で、そこに住んでいる蛇、山から流れ出る清水の中を優美な姿で泳ぐ蛇、古代の人々は、そんな蛇に神の姿を見たてたのであろう。

冬眠から覚めた蛇に、生命の再生を見たて、脱穀から華麗な変身＝復活を見たて、永遠なる神への信仰を深めたのであろう。

日本人は、あるものを何かに見たてることが好きなようである。神は見えないものと分かっていても、見てはいけないものと知りつつも、不可視のままではいられない。

巨石に神が依りつくことから、巨石そのものが神となってしまうのも同様である。

蛇円山が神奈備タイプの山かどうか知らないが、こう言った名が付いたということ自体、やはり蛇信仰からきているものにちがいない。

蛇が御神体といえば、大物主神は、倭迹迹日百襲姫の話で、その姿は蛇体と知られているので、蛇円山とミワ信仰は無縁とは言えないと思う。蛇円山を御神体として、その麓に大神神社が建てられたとしても不思議はないだろう。

ただ、一体どんな人々がいつごろ、その山を蛇のとぐろから蛇円山と名づけ、大神神社を建てたかということだ。

現在、その場所には大神神社というのはないそうで、石畳神社というのが一応比定できるということだ。（中略）もう、蛇円ということから蛇のとぐろで神奈備型の山を象徴していることは探った。

ここでは形ではなく、字そのものを見つめてみよう。

『蛇』は『ヘビ』で、即ち『巳』＝『ミ』である。

『円』はサークル、またはリングで、即ち『輪』＝『ワ』である。これをつなげば、蛇円山＝三輪山となる。

勿論、上古日本は、『蛇』のことを『ミ』とはいわず、『カ』または『ハ』である。それが畳語となって、『カカ』、『ハハ』となり、山カガシと言ったりするようになった。

『蛇』＝『巳』と考えられるようになったのは、干支が入ってきてからである。これは、奈良朝にはかなり広まっていたということで、この服部連の文武朝なら、特に渡来系の人々であってみれば、あたりまえのことだったにちがいない。

そこで、服部という渡来系的な土地に、祭主である服部連の関係で大神神社を勧請し、その近くの美麗な山を御神体とし、蛇円山と三輪山に因んで名づけてもいいわけである。

それにしても、なぜ、三輪山とはっきり命名せず、蛇円などと含んだ名づけ方をしたのか。服部連は本家本元の祭主なのにである。やはり、大物主神は地祇中の地祇であるし、渡来系の人間がわざわざ勧請し、あからさまに祀ることを憚ったのかもしれない。

こういうものを読むと、被説得力の強い筆者は、なるほどそうだったのかと、すぐ納得してしまう。ただ、疑問も残るのでそれについて書くことにする。

七

この問題を考える上で、ひとつだけ手掛かりがある。

岡山県の総社市に秦というところがある。高梁川の中流に伯備線の豪渓駅があり、その対岸が秦である。ここに秦・豪渓橋がかかっており、橋の秦側のたもとに、石畳神社がある。この神社は備中国下道郡の式内社・石畳神社〔注9〕に比定されており、これは断定できる。

実はこの神社の御神体も巨石で、それもとてつもなく巨大な磐座である。高梁川の水面から、ほぼ垂直にそそりたつ五〇mほどのひとかたまりの絶壁が御神体なのである。したがって、雨木のものとはかなり異なっている。ただ、上部はスフィンクスのようにも、鳥が羽を広げているようにも見え、人の手が加わっている可能性がある。

さて、筆者の知る限り、石畳神社と名のつくのは中国地方ではこの二社しかない。したがって、この関連性は十分に検討しなければならない。なぜなら神社名が同一ならば、多くの場合、祭神も同じだからである。

以下具体的な検討にはいる。

服部との共通点の第一は地名についてである。「秦」これは間違いなく古代に渡来系の人々が住んだ地名だと断言できる。しかも、「秦＝機織り」を示している。同じ吉備の地なので、古代においての秦・服部相互間の人的交流は十分考えられる。

第二の共通点は、神社にはともに本殿がなく、巨石を御神体としていることである。形態が違うとはいえ、磐座を祀っていることの共通性はやはり大きい。

第三に問題となるのは、服部の石畳神社の石柱に「式内岩畳神社」と刻まれていることである。備後国には「岩畳神社」という式内社は存在しない。雨木はかつての品治郡であるから、式内社は前出の多理比理神社だけである。

「式内岩畳神社」としたことについて二通りの解釈が成立する。

ひとつは、地域の人々の間には、秦の式内社・石畳神社から祭神を勧

請したことが伝承として伝わっていた。だから「式内」と刻んだのだ、というものである。

この場合は、秦と服部の両神社の祭神が同じである。当然、秦の石畳神社の祭神が問題となってくるだろう。これについては後ほど述べる。

もうひとつは、石畳神社＝多理比理神社である（または、事実はどうであれ、石畳神社＝多理比理神社だと地元の人が考えている）ということである〔注10〕。この場合、石畳神社＝大神神社をいうには、多理比理神社＝大神神社であることを証明する必要がある。これについて少し触れたい。

備後国の大神神社が『三代実録』に現れるのは貞観三年（八六一）。一方『延喜式』の完成は延喜二七年（九二七）で、六六年しか離れていない。延喜式に載るほどだから多理比理神社がポッと出の神社であるはずがない。実際には、貞観三年時点でもおそらく多理比理神社はあっただろう。あえて多理比理神社＝大神神社というのなら、この間に大神神社が多理比理神社と名を変えたということになるが、これは無理があり過ぎる。

さらに、通説では多理比理神社の祭神が、息長帯姫命または多比理岐志麻流美神になっていることからみても、多理比理神社＝大神神社は成立しない。

以上のみてきたように、秦と服部の両神社の関連を考える方が有力と思わざるをえない。

では、秦の石畳神社の祭神はいったい何であろうか。

実は、地元の伝承によれば、天日鷲神なのである〔注11・12〕。この神は『日本書紀』に作木棉者と記載されている。

つまり、木棉で織物を作ったり、あるいはその作り方を教える神である。まことに秦・服部にふさわしい神だといえる。

「石畳神社＝大神神社」説の成立もどうやら難しいようである。

〔注10〕通説には「石畳神社＝多理比理神社」とするものはない。ただ多理比理神社が服部本郷の北、神子原の地にあったという説はある。

〔注11〕天日鷲命は『日本書紀』には阿波国の忌部の先祖と記されている。徳島市二軒屋町の忌部神社や東京都台東区竜泉にある有名な鷲神社などの祭神になっている。

〔注12〕祭神を「神石」（つまり巨石そのもの）とする説―『式内社の研究』他や「経津主命」とする説―『吉備郡神社誌』もある。

八

では備後国大神神社はいったいどこにあるのだろうか。

これにはとりあえず、現時点では分からない、確定できないと答えるしかない。文献資料があまりに少なすぎるのである。

例えば六国史では、私が調べた限り、備後国の神名・神社についての記述があったのは『日本書紀』と『三代実録』だけである。それにその記述も以下の七件のみである（見落としがあるかも知れないが）。

①『日本書紀』巻七、景行天皇二七年十二月の条

（日本武尊命が）「到二吉備一以渡二穴海一。其處有二悪神一」

②『日本書紀』巻七、景行天皇二八年二月の条

（日本武尊命が）「唯吉備穴済神。及難波柏済神。皆有害心」

③『三代実録』貞観二年（清和天皇）二月二八日の条

「授　備後國正六位上大蔵神。神田神並従五位下一」

④『三代実録』貞観三年（清和天皇）十月廿日の条

「備後国正六位上大神々。天照真良建雄神並授二従五位下一」

⑤『三代実録』貞観九年（清和天皇）四月八日の条

「備後國従五位上甘南備神。高諸神並正五位下」

⑥『三代実録』元慶二年（陽成天皇）十一月十三日の条

「備後國正五位下甘南備神正五位上。従五位下天別豊姫神従五位上」

⑦『三代実録』元慶二年（陽成天皇）十二月十五日の条

「授二備後國天位隠嶋神従五位下一」

これらの条と『延喜式』神名帳の一七座、および『西備名區』の先ほどの記述だけから、埋もれてしまった備後国大神神社を見つけ出すのは現実的には難しい。したがって、これを確定するには中世以降の広範な文献を猟渉し、まったく新たな資料の発見が必要だと考えた。

九

そこで、とりあえず『備陽六郡志』を調べることにした。すると、寺社とその除地（年貢免除地）の一覧が掲載されていた。時代は『三代実録』からかけ離れているが、当時の有名無名を問わず、ほとんどの寺社が掲載されていると思われたので、すべてに目を通すことにした。

八〇頁にわたって寺社名が延々と続く。数でいえば、なんといっても目につくのは「荒神」である。これは村落共同体のアイデンティティの象徴として祀る神だから、多いのは当然だろう。全国でも広島県や岡山県には特に多いといわれている。

また、「八幡社」も多い。これは武士（源氏）政権が長く続いたことと無関係ではないだろう。意外なのは「稲荷神社」で、神社数全国第一位の割には少なかった。

字面が似ていて紛らわしいのは「犬神」「天神」「大明神」で、これが出るたび、ドキリとする。目指すは「大神」だが、これがなかなか出て来ない。

全部調べた結果、『備陽六郡史』内篇巻十にたった一つだけあった。沼隈郡地頭分村（現在の福山市瀬戸町地頭分）に「小社　三拾三ケ所」の一つ（十把ひとからげの一つ）として「壹畝　貳歩　大神社地」とある。これによると、社地は約三〇坪。かつて『三代実録』に記載された大神神社としては、やや役不足ではなかろうか。また「犬神」「天神」が多いので、この誤植・誤記の心配もある。これだけでは大神神社だとの確信はとても持てなかった。

そこで『西備名區』を調べることにした。すると沼隈郡地頭分村の項に神社名だけ「大神宮」とあった。さらに大正年間に編纂された『沼隈

郡誌』にも、社寺誌の瀬戸村「其他」の中に「大神社（宇根・山奥）」と神社名と所在地だけの記載があった。

以上により、「大神社」あるいは「大神宮」という神社が、沼隈郡地頭分にあったことだけは確かである。これを有力候補としてあげるのは当然であろう。

ただ、古代と近世との穴をうめる文献がなければ、『三代実録』に記載された備後国大神神社だとの断定はもちろんできない。

十

地頭分の大神社を訪ねるのに地図を探したが、「宇根」という小字がない。しかし、現地に行って聞けば分かるだろうと思って行ってみたが、尋ねたどの人も知らないという。瀬戸公民館に問い合わせても、わからないという返事だった。どうやら現在では死滅してしまった地名のようである。

そこで、福山市民図書館に行って相談することにした。いろいろ調べてもらったが、ちょうど参考室の専門司書の方がお休みで、わからないということだった。しかし、「瓢箪から駒」というべきか、「犬も歩けば棒にあたる」というべきか。このとき、まったく新たな発見があった。

開架室の司書の方が、平凡社の地名辞典『広島県の地名』で「大神神社」を索引で引くと二項目あった、と教えて下さったのだ。一つは前出の「石畳神社」関連である。ところが、もう一つは地頭分ではなく、庄原市の「丑寅神社」関連で出てくるのだった。ここで著者は大失敗に初めて気がついたのだった。

いままでの近世期の文献調査は、基本的に『備陽六郡志』を出発点にしている。けれどもこれは、備北の三次・庄原近辺つまり旧浅野藩領については、当然のことながら触れていなかったのである。何ということか、まったくうっかりしていた。

『広島県の地名』の記述の典拠は『藝藩通志』と『比婆郡誌』であった。さっそく、これを調べてみた。

まず、『藝藩通志』巻百二十四備後國三上郡四「祠廟」の項に、次のようにある。

艮三輪神社　庄原村にあり、二神、同殿に祭る、もと千代丸と呼ぶ地にあり、慶安二年、池峠山に移す、舞殿、神庫、經塔、鐘楼、随身門等あり、門の左に泉あり、里俗、靈泉と稱す、

また、これを受けて、大正元年に発行された『比婆郡誌』には、次のようにある。

丑寅神社　庄原にあり、村社にして伊弉諾尊、素盞嗚尊、吉備津彦命を祀り、三輪明神を相殿とす。もと庄原村河原といへる地にありし大神神社（貞観三年十月備後國大神神従五位下に叙すとあるはこれか）と、仝新町といへるにありし伊弉諾尊及吉備津彦命を祀れる艮神社とを、同村千代丸に移して両社二基を雙建し、（年暦不詳）その後天文

十八年九月、庄原杢之進、山内隆通重修、寛文十年九月一日、今の地に移して一社に祭り、三輪丑寅の二社を稱へ來りしを、明治四年一社名となし三輪大明神を相殿とし、以て今日に至れり。通志には池の峠に移せるを慶安二年とせり。

『比婆郡史』の『藝藩通史』にない部分は、おそらく口承か社伝を元に記したものだと思われる。これによれば、三輪明神（大神神社）と艮神社という別箇の神社であったときは、年代不明。千代丸に移してから天文十八年（一五四九）までは、大神神社と艮神社が一ケ所に二社並存の形で存在した。そして寛文十年（一六七〇）には社名を「三輪丑寅」と変えて二社名併記の一社となり、ついに明治四年（一八七一）に二社を完全に合祀し、一社名の丑寅神社としたことになる。そして、この河原にあった大神神社を、貞観三年の備後国大神神社に比定する説を提出している。

この河原の三輪明神の社殿は、現在では当然失われているだろう。したがって、この記事の比定通りだとすると、備後国大神神社は既に存在しないことになる。しかし、仮にそうであるにしろ、大神神社の比定候補として残しておく必要は十分あるだろう。

十一

話は元に戻るが、「宇根」の場所の調査は、専門司書の方に申し送りしておく、ということだった。三日後、図書館から連絡があった。地頭分の「大神社」の住所は「福山市瀬戸町地頭分二三一八」〔注13〕になっている、ということであった。

どうしてわかったのですかと尋ねると、広島県の「宗教法人名簿」を調べたということであった。こういう発想は、私などは思いもよらない。まさにプロだと思った。ともあれ地頭分の「大神社」は現存しているということが分かった。

また、その場所は、図書館によくいらっしゃる、地頭分在住の郷土史に詳しい山本昇氏から聞いて、住宅地図にマークして下さっていた。そのうえ、山本氏の電話番号まで尋ねていて下さり、本当に頭の下がる思いであった。私は図書館まで赴いて改めて礼を言い、地図のコピーをとった。そして、早速山本氏に連絡をとり、お教えを請うことにした。

山本氏のお宅にお邪魔する前に、「大神社」を撮影することにした。地図を頼りに探し、近所のおばあさん（三島さん）に確認した。そのお話によると、いまでも七月二〇日前後の日曜日に、近所の者が集まって、年に一度のお祭りをする、という。ただし、神主さんは呼ばないで内輪だけ、ということで、祭神も不明ということであった。

神社は山道に沿って、右手の斜面の三〇mほど上方にあった。生い茂った深い草の向こうに粗末な祠が見える。石の階段がついているが、しっかりしたものではない。

登ってみると、祠の中に高さ二〇cmほどのごく普通の石が安置されていた。おそらく、これが御神体なのであろう。祠の左手には、不釣合なほど大きな石灯籠がある。これは、銘が入ってなかったが、かなり古いもののように思えた。境内といえるほどのものではない。祠と灯籠だけ

でいっぱいになるほどの平地しかないのである。正直、これが『三代実録』に載った大神神社だとは思われなかった。

その後、山本氏を尋ね、お話をうかがった。研究内容のご専門は八幡信仰だということで、その話が中心であった。私は実のところ八幡社について、ほとんど何も知らない。祭神が応神天皇、神功皇后、仲哀天皇の三神（あるいは宗像三女神を入れて六神）の場合が多いこと〔注14〕源氏の守り神であること、神社数が稲荷社についで多く、全国で二万五千（一説に三万）社ほどあることくらいの知識しかないので、専門的な話にはまったくついていけなかった。しかし、分からないながらも「大神神社」に関連しては、次のことだけは理解することができた。

①八幡信仰の成立は疑問が多いが、原始八幡信仰は大分県宇佐地方の単なる氏神から発生したと思われる。

②この地方神が全国的な広がりをもつに至ったのは、大和政権の支配を強化する宗教政策によるものと考えられる。

③その際、三輪氏が八幡神の祭主として大和政権から任命を受け、宇佐に下ったと考えられる。その後、全国に八幡社を勧請していく過程で、各地で大神氏が祭主となっていったのではないか。

④当所では福井八幡宮が承和元年（八三四）に創建された際、社家として大神朝臣氏あるいは大神小山田氏が入部したと思われる。

⑤したがって、地頭分の「大神社」は、おそらくこの大神氏の居所に自らの祖神を祭ったものだろうと考えられる。規模からいっても『三代実録』に掲載された大神神社だとは思われない。

⑥なお、「大神社」は現地では「だいじんさん」と呼ばれているが、これは「おおみわ」の読みが難しいので転化したものだろう。

⑦また、文献にはないが、瀬戸町長和（ながわ）にも毘治谷（ひじや）大神社というのがあって、これも同じく大神氏が祖神を祭ったものだろう〔注15〕。

以上の山本氏の見解をどうこういうことはできないが、これら瀬戸町の大神社が『三代実録』にある大神神社とは思えないという点では私も同意見である。

ところで、「宗教法人名簿」には、他に四社の「大神社」の記載があった。このうち、三社は現地調査の結果、いずれも天照大神を祭神とする神社で、大神（おおみかみ）からきた大神（だいじん）さんであることがわかった。

したがって、ここでは箇条的にあげるにとどめる。

①沼隈郡沼隈町常石一一〇〇（東組）の大神社

- 創建不明（三〇〇年以上は経過。村上宮司による）

②尾道市浦崎町八一一（広畑（ひろばたけ））の大神社

- 伝承では平安時代の創建。（佐藤神主による）

③尾道市浦崎町三二七二の一（海老）の大神社

- 明治になってからの創建。（佐藤神主による）

残りの一社は福山市藤江町一六三にある大神社で、その御神体は「石」である。祭神は不明である。ただ、地元の方の話では石それ自体であるという。

規模は長和の大神社と同程度である。伝承によれば、漁師が網を引き上げたところ、形のいい石がかかっていた。しかし、邪魔なのでこれを捨てて網を投げたところ、また同じ石がかかっていた。これより、霊験ある石としてお祀りした、というものである〔注16〕。

藤江町のこのあたりは、本庄重政による干拓地として知られている。近年までは塩田があり、この収入による長者も多くいたという。

実は、この地の古称も「ひじや」といい、瀬戸町長和毘治谷と同音である。距離もそれほど離れていないので、住民の移動があったことを示唆しているのではなかろうか。いずれが古いかは断定できないが、おそらく、長和の方から勧請されたものと思われる。

〔注13〕「宇根」という大字はなくなっている。また、『沼隈郡誌』にあった「山奥」は「山奥にある」という意味ではなく、「山奥」という小字である。

〔注14〕八幡社の総本社は九州の宇佐神宮（宇佐八幡宮）である。この祭神は八幡大神（応神天皇）、比売大神（いわゆる宗像三女神＝多岐津比売命・市杵島比売命・多岐理比売命ということになっている）、神功皇后であるが、不可解なことがある。本来、神社における祭神の祀り方は、祭神が三柱の場合、中央に第一位の祭神、向って右に第二位、左に第三位となるべきであって、筆者の知る限り、まず例外はない。ところが、宇佐神宮の場合だけ、向って左に八幡大神、中央に比売大神、右に神功皇后となっている。これはいったい何を意味しているのだろうか。本論には直接関係ないが、興味深い問題である。

〔注15〕その後、この神社の祭祀を担当しておられる福井八幡宮の宮司・長島孝明氏に確認したところ、祭神は「大国主命」で、縁起は不明ということであった。

〔注16〕この「何度すてても網にかかる石」の伝説は、瀬戸内沿岸の神社（特に漁村にある神社）には広く分布する。

十二

さて、文献を調べていて、収獲はもう一つあった。大物主神あるいは大国主神を主祭神として祀った神社が比較的備後国には少ない、ということがわかったのである。

神様は全国的に有名である。しかも、出雲大社のある同じ中国地方なのだから、これを祀る神社が多くあってもよさそうに思う。だが実際には、小社（無神格の社）を別として、旧縣社・郷社はもちろんのこと旧村社クラスにさえあまりない。これはいったいどういうことなのだろうか。別のテーマとして考えてみる価値は十分ある。これほど大物主神を祀る神社が少ないというのに、備後国の大神神社はいったいだれが勧請したのだろうか。

そう思ううち、私は何か不思議な胸騒ぎを覚えた。今まで見落としている重要なことがある—そう直感した。あせるな、落ち着いて考えろ！その時、尊敬する郷土史研究の先輩・八木敏乗氏が話されていた言葉を

思い出した。

―神は人とともに移動する―

神社ばかりに目がいって、この大原則を見逃していたのである。

全国的にみると、大神神社が勧請された地域には、「三輪」「美和」「三和」の地名だけでなく、「大和」「山門」の地名が残るところもある。大神神社とヤマト王権の密接なつながりを考えると、地方勢力を屈服させていく過程において、ヤマトから相当数の人間が大物主神の神を担いで進駐していったと考えてもよいのではないだろうか。

『大神神社史』は、「大神神社の分祀」の一章を設けて代表的な分祀社をあげている。これによると、広島県にはやはり一社もなく、山口県一社、島根県一社、鳥取県二社となっている。これを見る限り、中国地方への分祀は、それほど多いとはいえないようだが、例外があった。岡山県（備前・備中）の五社である。

備前・備中は古代吉備の中心地であり、しかも、古代製鉄・製塩の技術を寡占していた。造山古墳、作山古墳、両宮山古墳などの巨大古墳をみてもわかるとおり、ヤマト王権に対抗するだけの実力を備えていたのである。

つまり、ヤマト王権にとっては、潜在的な仮想敵国といってよいほど脅威だったのではないか。当然、吉備の分断・弱体化をねらったはずである。それが、岡山県に五社という数字になってあらわれたのであろう。

このうち式内社が三社ある。

①美和神社　旧邑久郡西須恵村境三和ノ峯

②大神神社　旧上道郡四御神村

③神神社　旧下道郡八代村宮山

これらはいずれも社殿が現存し、祭祀も続いている。また、地名にはっきりと神社名称の影響が見られる（岡山県にはこと以外にも「三輪」「美和」の地名が数か所残っている）。この周辺に、三輪氏がある程度まとまった単位で移住して、しかも、その後土着したに違いない。これが、現在まで祭祀が絶えなかった最大の理由ではないか。

では、備後の場合はどうであろうか。

備後は「道の後」であり、吉備の辺境の地であった。吉備の勢力があまりおよばなかったためか、早い時期にヤマト政権の支配下に置かれたとみられている。

地名を調べてみたら「三輪」「美和」はもちろんのこと、それらしい痕跡もない。しかし、九世紀には確かに大神神社は存在したのである。これをどう考えるべきであろうか。

備後国の大神神社はいったい誰が勧請したのだろうか。勧請した人間は確かにいた。だが、杳としてその所在地が分からなくなっている。伝承としても、地名としても残っていない。備前・備中の場合と対照的である。何故だろう。それは、勧請した人間が長期間定住せず、去って行ったためではないか。そのような人間を想定できないだろうか・・・。

そう思ううち、はっとした。ひょっとすると、佐伯宿禰麻呂のように畿内から派遣された国司ではないのか。彼らは任期が切れれば帰ってしまうではないか！もしかすると、大神氏自身が備後に国司として赴任し、

大神神社を勧請したのではないか。いままで、何故こんな単純なことに気づかなかったのか。私は急いでもう一度、人物索引から六国史を調べ直した。

すると……やはりあった！

まず、『文徳実録』齊衡二年（八五五）二月十五日の条に

外従五位下大神虎主為二備後介一。侍醫如レ故

とある〔注17〕。また、大神虎主についての記載は何件かあるが、死亡記事が『三代実録』貞観二年十二月二九日（八六〇）の条に

従五位下行内藥正大神朝臣虎主卒

とあり、そのあとに薨卒伝（生前経歴）が次のように記されている。

虎主者、右京人也。自言。大三輪大田々根子之後。虎主。本姓直神。成レ名之後。賜二姓大神朝臣一。（中略）承和二年為二左近衛醫師一。遷二侍醫一。十五年授二外従五位下一。兼二参河掾一。後遷兼二備後掾一

（後略、波線筆者）

これによると、大神虎主は、承和十五年（八四八）に一度備後掾となり、その後、齊衡二年（八五五）に出世して備後介になっている。また波線で示したように、大田田根子の子孫という強い自覚、あるいは誇りを持っていたことがうかがえる。

この人物が大神神社を勧請したのではないだろうか。それが仮に承和十五年（八四八）備後掾になった年だとすると、仁壽元年（八五八）に初めて位階を受けた〔注18〕比較的新しい神社となる。それで、式内社にならなかったのかも知れない。そして、虎主の死後『三代実録』貞観三年（八六一）の条に初めて登場したというわけである。

大神虎主が備後国に一度でも赴いていれば、国府鎮護の意味から、また、手軽に参拝できるように、大神神社を備後国府の近辺に勧請したと考えられる。ならば、府中市あるいは神辺町〔注19〕のどこかにあった（ある）ということになる。

〔注17〕従五位下という官位は、備後国などの上国では「守」になることができる。「侍醫如レ故」とあるのはこのためだろう。侍醫兼任なので、遥任と思われる。しかし、任地に配下の者（大神氏）を送り込み、大神神社を勧請しても不思議はない。また、備後国の大神神の受けた位階も従五位下であったことは、虎主が勧請したことを暗示しているようにも思える。

〔注18〕『文徳実録』仁壽元年（八五八）正月二七日の条に「天下諸神。不レ論二有位無位一。叙二正六位上一。」とある。

〔注19〕備後国府の所在地は「府中説」「神辺説」の二通りある。数次にわたる調査により、市街から奈良時代の遺構が発見されてい

る府中市の方が有力だといわれている。神辺説は国分寺・国分尼寺跡があり、「方八町」という地名が残っているというのが根拠だが、国府・国衙らしい遺構は出土していない。

十三

仮に国府が神辺にあったとすると、ひとつ気になることがある。神辺の国府比定地は、弥生集落遺跡の「大宮遺跡」と重なっている。この「大宮」の名称は、文字通り「大きな神社がある土地」という意味でつけられたのであろうが、ひょっとすると「おおみわ」から転化したのではないかと思ったのである。

そこで、神辺歴史民俗資料館に行って尋ねることにした。

館長はおおむね次のように話された。

現在はここは湯野とよばれており、地名としての「大宮」は消滅している。大宮というのは、かつてこの近辺に八幡社があったためで、現在、この八幡社は中条に遷座されている。したがって、大神神社とは関係がないのではないか。

けれども山本氏の話にあるように、八幡社の祭祀は、当初大神氏が受け持った可能性もある。したがって、国府による支配に関連して大神氏がこの地に来ていれば、その「大神」が転じて「大宮」になったと考えられなくもない。しかし、正直苦しい推測である。

ところが、その後再度資料館に行く機会があって、これは大神神社に関係するのではと、次のような資料を教えて下さった。それは、故高垣不敏氏が昭和三一年八月一日付の『神辺町広報第28号』書かれた「湯野山王さん」という記事であった。

湯野の山王さんはその地山王山の山巓に祀られており、大己貴神（オーナムチノカミ）を始め二十一神を以て祭神とし、公式には日枝神社といわれています。（中略）この神は、比叡山に延暦寺を創建するに当り、日吉（比叡）の神たる大山咋神（オーヤワケイノカミ）を山下に遷し、新たに守護神として大三輪神（オーミワノカミ＝大己貴神）を祀って大比叡の神と称し、更にそれを唐の天台山（浙江省台州府）における山王祠に擬らえて山王と称し、且つ大山咋神以下の諸神をも同一神名のもとにおさめたものであります。（中略）また、三聖のうち大己貴神を大宮、大山咋神を二の宮、聖眞子を三の宮と呼ばれます。

もし、大神神社が神辺にあったならば、逆に、国府＝神辺説の有力な傍証になりうる－そういうことを、以前お話しておいたこともあって、館長はこの記事に「大三輪神」の名を発見し、注目されたのであろう。

しかし、山王信仰は比較的新しく、備後国大神神社との直接の関係はなさそうである。念のために現地に行って調べると、長元二年（一〇二九）に日枝神社から分霊・勧請したという記念碑が建てられていた。残念ながら二百年ほど新しいのである。ただ、「大宮遺跡」の名称は八幡

社ではなく、この「山王さん」からつけられたようである。

元に戻ろう。実は、虎主が死亡した三年後に、虎主直系ではないが、もう一人の大神氏が備後国に国司として赴任していることがわかっている。『三代実録』貞観五年（八六三）の条に次のようにある。

従五位下行備後介小野朝臣國梁為レ守。外従五位下行左大史大神朝臣全雄為レ介

全雄はこの翌年に但馬介に転じ、貞観十年（八六八）には勘解由使次官になっている。

しかし、わずか一年の任期ではあるが、備後介になっているのである。これをみても、この時期の備後国と大神氏の関係はかなり深かったということがわかる。そして、大神神社の祭祀も、少なくともこのあたりまでは盛大に続いていたであろう。

しかし、備後国の大神神社は『延喜式』神名帳には記載がない。六国史に記載されている備後国の神社全部が式内社となっているわけではない。だが、朝廷と極めて近い位置にあった大神氏が祀る大神神社が、式内社からもれたことは不自然に思える。このことは、既に九世紀末には、この神社の祭祀が廃れていたことを暗示しているのではないだろうか。

貞観五年（八六三）以後、大神氏と備後国の関わりも、正史から一切消滅してしまう。パラシュート部隊のようにやって来た大神氏が国府から去り、二度と戻らなかった。もともと、備後にそれほど縁の深い神社ではないのである。祭祀する人間が絶えると神社がどうなるかは容易に想像がつく。祭主が消滅するとともに神は立ち去るのである。たとえ、社殿が残されても、時とともに朽ち果ててしまう。このようにして、備後国の大神神社は歴史の深い闇へと消えていったのではないだろうか。

結論を言うと次のようになる。

①大神虎主が備後国に大神神社を勧請したであろうという前提に立てば、大神神社はかつて国府近辺にあった。しかし、その後早い時期に祭祀が絶え、幾許かして社殿も消滅してしまった。つまり、現在、備後国大神神社はどこにも存在しない。

②もし①の仮説が間違いである場合、庄原市の「丑寅神社」が有力であり、大神神社の祭祀を受け継いでいる可能性がある。伝承とはいえ、かつて三輪明神と呼ばれた時期があったのは、この神社だけである。

③瀬戸町の大神神社は、規模等から考えると、やや無理があると思われる。ただ、福井八幡宮の縁起と合わせて再度検討してみる価値はありそうだ。

④神谷説の甘南備神社、石畳神社は本論で詳述したように、大神神社ではないと断定してよいのではないか。今後、よほどの史料が出てこない限り、この結論はくつがえらないと思われる。

〈参考文献〉

★レジュメ「備後に於ける大神神社について」　神谷和孝著
★古事記　岩波書店・角川書店・小学館
★日本書紀　創芸出版・吉川弘文館・小学館
★続日本紀　岩波書店・吉川弘文館
★日本後紀　吉川弘文館
★続日本後紀　吉川弘文館
★日本文徳天皇実録　吉川弘文館
★日本三代実録　吉川弘文館
★延喜式（神名帳）　吉川弘文館
★六国史索引一～四　吉川弘文館
★甘南備神社御由緒略記　甘南備神社
★備陽六郡志　宮原八郎左衛門直御編著（備後叢書）　東洋書院
★西備名區　馬屋原呂平重帯編著（備後叢書）　東洋書院
★福山志料　菅茶山編著　森山書店
★藝藩通志　頼惟柔編著『藝藩通史』刊行会
★蘆品郡志　蘆品郡自治会編　東洋書院
★沼隈郡誌　沼隈郡誌編纂委員会編　臨川書店復刻
★比婆郡誌　日野篤信著　比婆郡役所（芸備郷土史刊行会復刻）
★大神神社史　大神神社史料編修委員会編　大神神社社務所
★式内社調査報告第二二巻山陽道　式内社調査委員会編　皇學館大学出版部
★式内社の研究　第五巻山陽道・西海道　志賀剛著　雄山閣出版
★日本の神々　第二巻山陽・四国　谷川健一編著　白水社
★広島県の地名　平凡社
★広島県大百科事典　中国新聞社
★岡山県大百科事典　山陽新聞社
★広島県宗教法人名簿　広島県総務部文教課管理係
★広島県神社誌　広島県神社誌編纂委員会編　広島県神社庁
★備後国府跡―推定地にかかる一九九〇年度調査―　府中市教育委員会
★神辺町広報第28号（昭和三一年八月一日）　神辺町広報課
★神々の系図　川口謙二著　東京美術
★神社の古代史　岡田精司著　大阪書籍
★大神と石上　和田萃編著　筑摩書房
★三輪山伝承　山中智恵子著　紀伊國屋書店
★日本文化と八幡神　佐々木孝二著　八幡書店
★大系　日本の歴史2　古墳の時代　和田萃著　小学館
★日本の古代5　前方後円墳の世紀　森浩一編　中央公論社
★日本の古代7　まつりごとの展開　岸俊男編　中央公論社
★日本神話　上田正昭著　岩波書店
★続・神々の体系　上山春平著　中央公論社
★日本の神々　平野仁啓著　講談社
★吉備の古代史　門脇禎二著　日本放送出版協会